

吹田市立博物館

博物館だより

NO. 3

SUITA CITY MUSEUM



吉志部瓦窯跡出土軒丸瓦(当館保管)

平成6年度 特別展

「瓦 ー平安の都へー」

平成6年11月3日(木) ～ 12月11日(日)

吹田市岸部北4丁目にある国指定史跡吉志部瓦窯跡は、平安京造営当初の瓦を生産した窯として知られています。この地に宮都造営のための官営瓦窯が築かれたのは、5～7世紀に隆盛をみた千里丘陵における須恵器生産の実績によるところが大きいと考えられます。昨年度特別展ではその須恵器生産を取り上げ、吹田の古代窯業の黎明期の姿を顧みしました。平成6年は平安建都1200年にあたることから、今年度は、8世紀末から9世紀初頭にかけて造宮瓦窯として操業された吉志部瓦窯跡を足掛かりに、平安京で使われた瓦の生産体制の変遷と瓦の流通の様相を再現します。

平安京で瓦が葺かれたのは平安宮や貴族の邸宅あるいは寺院といった建物に限られていましたが、使用された瓦やその供給の実態は平安時代約400年の間に様々な変化を遂げます。近年の発掘調査の成果によると、平安京の瓦は前期・中期・後期の3期に区分されることが明らかになっており、それぞれ、政治史上の律令制末期、摂関期、院政期に相当します。今回の展示では、この時期区分に沿いながら、各時期の瓦の様相をみていきたいと思います。

平安京の造営当初には平城宮、難波宮、長岡宮など前代の都の瓦を再利用しましたが、一方で、平安京周辺の官営瓦窯や淀川沿いの都からはやや離れた地で瓦が生産されました。吉志部瓦窯はそのひとつであり、製品は豊楽院や朝堂院などの主要な建物に使用されました。吉志部瓦窯の瓦工はその後、洛北の地に移りますが、前期の瓦は一貫して官営の体制によって生産されました。前期の展示では、吉志部瓦窯跡から洛北の西賀茂瓦窯や栗栖野瓦窯跡へと展開する瓦生産の変遷をたどります。

10世紀になると、平安京の瓦は都周辺に新たに築かれた官営瓦窯が中心となって生産されましたが、10世紀後半以降には、平安宮の修造にあたって、地方の諸国から瓦を搬入することが行われるようになり、吉備・備後の瓦や九州の瓦もみられます。また、11世紀前半に藤原道長が造営した法成寺には丹波産瓦が使われ



吉志部瓦窯跡出土窯道具(大阪府教育委員会保管)

ましたが、その丹波の瓦生産の展開は亀岡市の篠窯跡群や王子瓦窯跡によってみられます。

後期には鳥羽離宮や法勝寺をはじめとする六勝寺には、当時有数の大窯業地帯であった讃岐国や播磨国などから瓦が供給されました。播磨では久留美窯跡群、神出古窯跡群、魚住古窯跡群によって瓦生産の様相を探り、讃岐では、ますえ畑瓦窯跡や北条池北畔瓦窯跡に加え、龍燈院や曼荼羅寺の瓦に平安京との関係を探れます。

以上のように、この特別展では、平安京の主要な建物の瓦の変遷をたどりながら、その生産地の窯跡の資料や在地で使われた製品に目を向け、平安時代の造瓦体制のあり方を考えたいと思います。

また、瓦のみならず、平安京では官舎や貴族の邸宅から平安貴族の日常の暮らしが知ることができる資料が出土し、西市跡では都の人々の生活を支えた様々な品々が出土しています。今回展示されるこれらの出土品を通して、古代都市平安京の繁栄の姿がうかがえることと思います。



丹波王子瓦窯出土軒丸瓦(同志社大学考古学研究室蔵)



丹波王子瓦窯出土軒平瓦(同志社大学考古学研究室蔵)

講演会ご案内

●11月13日(日) 14:00~15:30

「平安京に運ばれた瓦」

奈良国立文化財研究所 上原真人氏

●11月20日(日) 14:00~15:30

「平安京の人々と生活」

同志社大学 森浩一氏

会場は吹田市立博物館2階講座室。各講演会とも受講無料で先着順(120名)です。

ロビー展示

古代馬の復元



博物館ロビーに展示されている古代飾馬

博物館のロビーには復元された山田銅鐸と古代の飾馬かざりうまがあります。なかでも古代の飾馬は、新芦屋古墳から出土した古墳時代後期の鉄地金銅張馬具てつじこんどうばりばぐを、当時の姿に再現し、復元された馬体に飾りました。馬具は遺物から正確に製造工程を分析し、金工によって、製作されています。そこで問題となるのは、馬体の復元の方法です。

競争馬は別として、現在では役馬はもう観光地でしか見れない時代と

なりました。このような馬や、われわれの記憶にある荷車を牽ひいていた役馬はかなり大型のもので、古墳時代の馬としては大きすぎます。昭和41年、東大阪市日下貝塚では古墳時代の馬骨が発掘されました。馬は円形土坑から検出され、家畜解剖学くさかの専門家の鑑定では、12歳のオスで、体高は125～130cm、蒙古馬系の中型馬であるとされました。

以後の馬体資料や、明治初期までの例によると、我が国で古来から繁殖してきた馬や、江戸時代に各藩が繁殖した馬は、おおむね中型・小型の在来種で、このうち特に小型馬は西辺境に生息している傾向にあります。

ところが、われわれがみているほとんどの役馬は、実は明治時代以降に政策的に改造されてきた馬なのです。政府は日清日露戦争を経験して、わが国の軍馬は、体高・速度・牽引力・持続力のいずれをとっても大きく劣ることを痛感し、1896年から馬の改造に乗り出し、1935年くらいには体高150cm級に完全に改造されてしまいました。畜産学会では、このように1国の馬が短期間に完全に改造しつくされることは世界に類例がないとされています。

ただ、このような政策にもかかわらず、限られた地域では在来馬が残されてきました。対馬つしまや隠岐おきなどは道が細く険しく、女性が馬を取り扱うことも多いなかであって、大型馬はむしろ適さないのです。このようにして、明治以降の国策にもかかわらず、トカラ馬や琉球馬、対州馬、御崎馬みさきなどの在来馬が辺境に温存されることとなりました。

以上の経過から、古墳時代の馬を造るにあたっては、在来形の中型馬を復元することと

なり、なかでも、宮崎県串間市都井岬に自然繁殖し、高度に純粋な在来馬と評価されている御崎馬を復元することとなりました。特に御崎馬をモデルとした理由は、日下貝塚検出の古代馬の馬体に体高が一致すること、専門家の調査により馬の純粋性(血統)についての考え方が詳細に整理されていること、現地の御崎馬管理組合等によって良好な管理下にあることなどです。復元にあたり、実際に都井岬で生息している資料を克明に調査し、体格や表情を記録し、再現しました。もし、市民の皆様が観光で都井岬を訪れた時、この馬が目の前に現れるかもしれません。なお、復元調査にあたっては、財団法人馬事文化財団(馬の博物館)、独協大学第1解剖学教室、御崎牧組合の方々にご協力を頂きました。



自然繁殖されている御崎馬

〔主要参考文献〕

堅田 直 「東大阪市日下遺跡調査概報 帝塚山大学考古学シリーズ2」 1963

林田重幸 「日本在来馬の研究」『日本古代文化の探究 馬』 1974

林田重幸 「日本在来馬の系統に関する研究」 日本中央競馬会 1978

仏教美術講演会 「祈りの美 —仏像—」

4月29・30日の両日、本館館長西村公朝による仏教美術講演会「祈りの美—仏像—」を開催しました。

講演会では、西村館長の長年の仏像修理の経験や調査・研究の成果をふまえて、仏像の見方とその特徴について、イラストをまじえてわかりやすく説明しました。なかでも、仏像の形・心・教をどのように読み取り、そこから仏教の真髄を理解していくかを独自の視点とユーモア溢れる口調で語りかけ、講演会に参加したおよそ150名の聴講者は、熱心に講演に聞き入っていました。



講演会風景

吹田市観音寺の石造塔婆

六甲山麓遺跡調査会

古川 久雄



観音寺石造塔婆

吹田市南高浜町7-6 浄土宗観音寺の墓地に、鎌倉時代正応6年(1293)在銘の五輪塔として知られた石造塔婆があります。『吹田市史』8巻では写真図版で紹介され、亘節氏の『吹田志稿』にも貴重な鎌倉時代の石文として銘文内容と時代背景が検討されています。

しかし、その石塔自体は亘氏がすでに「寄せ集めの供養塔で五輪塔を形成した」と述べているように、鎌倉時代の完存の五輪塔ではありません。一見して泉南産の和泉砂岩とわかる水輪はもちろん、石質のよく似た花崗岩製の地輪・火輪と一石彫成の空風輪ともそれぞれまったくの別物で、明治頃に墓地を整理した際、散乱している適当な部材を集めて五輪塔の形にしたものと思われます。

この寄せ集め五輪塔の地輪にあたる部分は、現西面での計測値が高さ35.2cm、幅上下とも37.0cmで、地輪としては背の高いが目立ちます。また四面には、それぞれ線彫蓮華座上月輪内にウーン(蓮)・タラク(空)・キリーク(火)・アク(水)の金剛界四仏梵字(種子)を配し、現南面(タラク)をのぞく三面の梵字の左右に「正応六年癸」「正月廿八日」「悲母幽霊」「往生極楽」「橋氏女」「狛近重」の6行の文字が刻まれています。(図2)

この金剛界四仏種子に注目すると、今五輪塔地輪として積まれている部材が元々五輪塔でなく宝篋印塔の塔身であることが明白です。中世石造美術の一般論でいえば、五輪塔に梵字を刻む場合は空風火水地の五部の四面にキャ(頂)・カ(空)・ラ(火)・バ(水)・ア(地)の四転を配するのが本格であり、地輪の四面はア(地)・アー(空)・アン(火)・アク(水)でなければならないのです。逆に、地輪に蓮華座上月輪内の金剛界四仏を配した五輪塔など、常識的にはどこにも存在しないと思います。(図1)



図1 宝篋印塔・五輪塔模式図

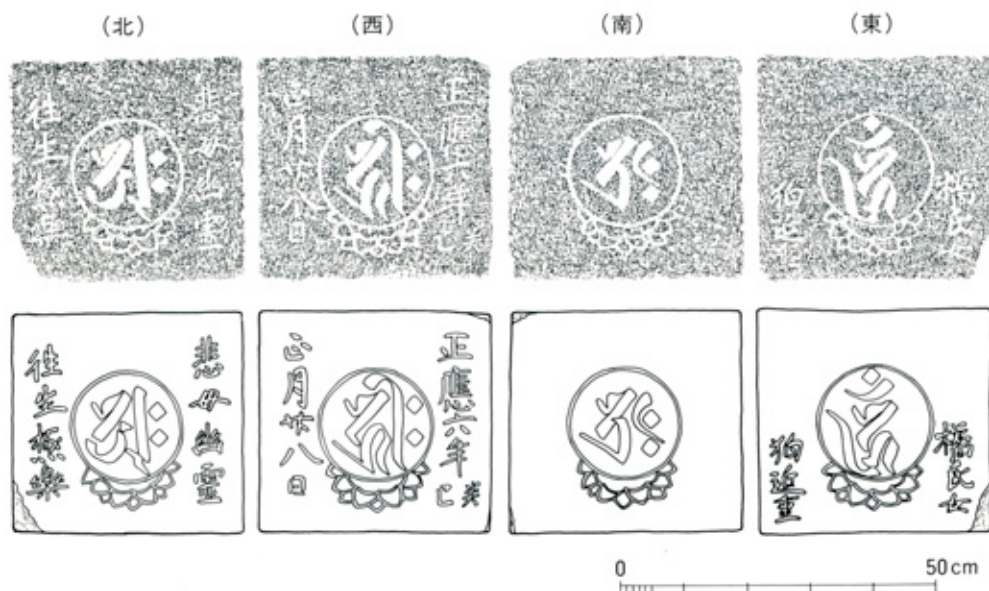


図2 宝篋印塔塔身四面拓影及び実測図(1/12)

そこで、これを正應6年の宝篋印塔塔身として見直してみると、一残欠とはいえ極めて注目すべき資料ということになります。つまり、在銘宝篋印塔としては大阪府下最古であり、全国的にみても有数の古塔なのです。また塔身のみが残欠であるため、基礎・笠・相輪など他の部分の形式がわかりませんが、塔身幅37cmというのは宝篋印塔としてかなりの大型に属し、他の類例と比較すると総高210～220cmの七尺塔に復元することができます。

宝篋印塔は、無数に造立された中世石造供養塔婆の中でも五輪塔や板碑^{いたび}とならんで極めて普遍的なものです。その特異な形態の成因や伝播・拡散過程というような問題は、十分に解明されているとは言えません。もちろんここでそんな大問題について述べるつもりはありませんが、そのテーマと大きくかわる初期宝篋印塔の分布を見てみましょう。

故田岡香逸氏によると、鎌倉中期末とする弘安7年(1284)以前の宝篋印塔は無銘・残欠を含めても全国で20基(近江10、大和4、山城3、播磨・相模・常陸各1)に過ぎず、大和・山城・近江の三国に集中しています。つづいて後期初頭に当たる弘安8年以降正應6年まで(1285～1293)の在銘資料でも8基(大和・山城各2、近江・紀伊・若狭・備前各1)。次の永仁(1293～1299)銘にいたってようやく数が増え、大阪府でも従来最古とされてきた能勢町野間興徳寺の永仁4年(1296)塔が現れるのです。

このような中に観音寺の正應6年塔を位置付けると、宝篋印塔という斬新な形の石造塔婆形式が、大和・山城・近江という中世石造美術先進地の枠を越えて全国に普遍化していく過程のごく初期のものだということがわかります。

一見何のへんてつもない宝篋印塔の残欠ですが、吹田の中世史を考える上では見逃すことのできない貴重な資料なのではないでしょうか。

新資料紹介

吉志部瓦窯造瓦工房復原模型

博物館では平成6年度特別展「瓦—平安の都へ—」の展示資料とするため、吉志部瓦窯(国指定史跡)の模型を製作しました。本瓦窯跡は、平安京造営当初の官営瓦窯跡として、わが国の造瓦史上、特記される重要遺跡です。昭和43年の発掘調査で窯の構造や配列が明らかになり、昭和62年以降の調査で窯の前面に展開する造瓦工房の様子分かってきました。

模型ではこのような調査の成果を十分に活用し、粘土採掘から瓦の製作、乾燥、そして築窯、薪の伐採、焼き上げに至るまでの工程が分かるように造られています。なお、この模型は特別展が終了したのち、第2展示室で常設展示される予定です。



■■■■■■■■■■ 編集後記 ■■■■■■■■■■

今年は、平安建都1200年で京都を中心に様々な催し物が行われていますが、吹田市立博物館の秋の特別展「瓦—平安の都へ—」は、この記念すべき年に京都と地方の関わりを造宮瓦窯の面から見直してみようと企画したものです。各地から集められた瓦を見ながら、華やかな京の都の造営の一端を担って腕を振るっていた瓦工達に思いを馳せてはいかがでしょうか。

吹田市立博物館だより 第3号

平成6年10月25日発行

吹田市立博物館

〒564 吹田市岸部北4丁目10番1号

TEL. (06) 338-5500 FAX. (06) 338-9886

■交通案内

JR岸辺駅下車徒歩20分

阪急吹田駅から桃山台駅前ゆき、山田堰切山ゆきバス「佐井寺北」下車徒歩10分

千里中央ゆき、阪急山田ゆき、摂津ふれあいの里

ゆきバス「岸部」下車徒歩10分

阪急南千里駅からJR吹田ゆきバス②・③系統「佐井寺北」下車徒歩10分

